「古本説話集」の敬語についての一考察

三十一回生　寺本ゆかり

目次

序
本論
第一章　補助動詞四段活用「給ふ」について―「（さ）せ給ふ」と「動詞連用形＋給ふ」を中心に
一節　「（さ）せ給ふ」の使用対象
二節　「動詞連用形＋給ふ」の使用対象
三節　「（さ）せ給ふ」と「動詞連用形＋給ふ」の使用対象の比較
四節　まとめ
第二章　謙譲の補助動詞―「奉る」「参らす」を中心に
一節　上接する動詞について
二節　使用対象について
三節　説話内の使用分布
四節　まとめ
第三章　「侍り」と「候ふ」
一節　「侍り」について
二節　「候ふ」について
三節　説話内容からみた「侍り」と「候ふ」
四節　まとめ
結論

序

院政期に成立したとされる「古本説話集」には、異なり語数八六語（但し動詞・補助動詞・助動詞）の敬語が使われている。その中から、尊敬語、謙譲語、丁寧語各々一語或いは二語を選び、特にそれらの使用対象を中心に、その使われ方の特徴を捉え、それにより「古本説話集」に用いられた敬語がどのようなものであったかを考えることにする。猶、研究方法の一として、ジャンル及び成立期をほぼ同じくする「今昔物語集」に用いられている敬語と比較してゆくが、その資料として桜井光昭著「今昔物語集の語法の研究」を用いた。特に使用対象を詳細にみてゆくため、

同氏による使用対象の基準で分類した。分類基準は次の如くである。

群	使用対象
Ⅰ	天皇　皇族　摂関　大臣
Ⅱ	大納言　中納言　大将　中将など　及び僧侶
Ⅲ	Ⅱ群に続くもので国司以下
Ⅳ	その他　仏神、通行中、旅先関係、特別な利害関係、肉親、男女関係など

第一章　補助動詞四段活用「給ふ」について――「（さ）せ給ふ」と「動詞連用形＋給ふ」を中心に

本章では使用対象を詳細にみていきながら随時「今昔物語集」の使用対象と比較していったが、そこに何ら大きな相違はみられなかった。

第二章　謙譲の補助動詞――「奉る」「参らす」を中心に

表一、表二を比較すると、「参らす」の勢力が「古本説話集」において台頭してきているのがわかる。本章では主に、如何にして「参らす」がその勢力を強めてきたかを探る。

一節　上接する動詞について

謙譲の補助動詞に上接する動詞（補助動詞を含む）を語彙論的な傾向をみる目的から、「国立国語研究所報告13」

表三　「古本説話集」接続動詞の分類表

	動詞		
	2.1	2.3	計
奉る	11 15.7 %	59 84.3 %	70 100.0%
参らす	11 38.0 %	18 62.0 %	29 100.0%
申す	3 23.1 %	10 76.9 %	13 100.0%
きこゆ・きこえさす	—	3 100.0%	3 100.0%
給ふ（下二）	—	3 100.0%	3 100.0%

表四　「今昔物語集」接続動詞の分類表

	動詞			
	2.1	2.3	2.5	計
奉ル	83 36.9%	137 60.9%	5 2.2%	225 100.0%
聞ユ	—	15 100.0%	—	15 100.0%
申ス	8 11.8%	59 86.8%	1 1.5%	68 100.1%

動詞	2.1	抽象的関係（人間や自然のあり方のわく組み）
	2.3	人間活動－精神及び行為
	2.5	自然－自然及び自然現象

表四は桜井光昭著「今昔物語集の語法の研究」による。分類基準は国立国語研究所「分類語彙表」

の分類語彙表によって分類したものが表三である。但し同語彙表は、現代語を対象としているので、表三作成の際は、そのまま古代語に適用した。表三から、抽象的関係を示す動詞に最も多く接続するのが「参らす」であることがわかる。これは則ち、「参らす」の2.1（抽象的関係）と2.3（人間活動）に使われる割合が、他四例と比べて差が小さく、比較的平均して種々の動詞に接続していることを示している。また「今昔物語集」の接続動詞の分類表（表四）の「奉ル」と表三の「奉る」の各々の接続動詞の割合を比べると、「古本説話集」の方が、より2.3（人間活動）に偏って使われているのがわかる。これは「今昔物語集」で「奉る」が割に平均して種々の動詞に接続していたのに対し、「古本説話集」では「参らす」の出現で「奉る」の使用数が削減されたという事だと考えられる。では、なぜ特に抽象的関係が減少したかというと、それは、「講座5 国語史 敬語史」によれば、本来「奉る」は、ここでいう人間活動に接続していて徐々に他の範囲に使用を広げていったとあり、「古本説話集」の時期に「参らす」が勢力を伸ばしてきたため、「奉る」が後に広げていった範囲の所に「参らす」の介入を許し、結果的に「奉る」の本来の使用範囲でない抽象的関係が減少することとなったためであろう。また裏を返せば、「参らす」は抽象的関係の分野から、「奉る」の勢力範囲に侵入していったらしいともいえるであろう。しかしまだ「奉る」の勢力は「古本説話集」において圧倒的であった。

二節　使用対象について

「奉る」「参らす」「申す」について考えてみたところ、地の文では「奉る」「参らす」「申す」各々に相違点は殆んどみられなかったが、会話文においては、用例数が少ないこともあろうが、「申す」の敬度が、使用対象を調べた結果、他の二語より多少落ちているということがわかった。

三節　説話内の使用分布

「奉る」「参らす」の説話内の使用分布を整理すると、両者共に本朝仏法・天竺説話に集中して使用されていることがわかる。そこで謙譲の補助動詞の大半が仏神関係に用いられていたらしい事が予想されるものである。また、「奉る」と「参らす」は各々二二説話、一一説話に使われ、両用された説話はそのうち七説話ある。つまり「参らす」からみると約六割は、「奉る」との混在であることになる。これは元来は、「参らす」の使用部分に他の謙譲の補助動詞があった（例一のような場合）、全く何もない所に「参らす」を新たに加えた（例二のような場合）などによって生じたものであろう。この仮説の立証として各々一列ずつを次に掲げる。

例一（古本説話集）さて覺めたるに、又おなじやうになを前にあれば泣く〳〵又返しまいらせつ。

（今昔）驚テ見レバ亦同様ニ前ニ有リ。亦前ノ如ク返シ奉ツ。

例二（古本）「この世はめでたく心にくゝいふにて過ぎさせ給へるに、後の世いかゞと思ひまいらせしに、

ひたふるに御をこないたゆみなくせさせたまひて…」

（今昔）現世ノ微妙ク可咲シクシテ過サセ給ヒニシカバ後生ハ罪深クヤ御シマサムズラムト人皆思ヒケルニ御行ヒ緩ム事无ク貴クシテ……

「参らす」のみ用いられ「奉る」の見られぬ説話は、比較的新しい時代の成立のものとみられ、一一世紀以前に成立していたと考えられる説話をみると「奉る」他の敬語と「参らす」は混用されているのである。

四節　まとめ

謙譲の補助動詞の中で「古本説話集」成立期に勢力を持っていたのは「奉る」であるが、「参らす」が当時徐々に力を強めつつあり、「きこゆ、きこえさす」の地位を崩しつつ、「奉る」にまで侵出していったものと考えられる。それは「奉る」と「参らす」の上接動詞に共通なものが多くあること、使用対象の範囲からみて「参らす」のそれを「奉る」のそれが含有していること、両者に使用状況（敬意主体と敬意対象との間の落差等）の違いがさほどみられないこと、「参らす」が本来「奉る」であった所に多く使用されていること、などからわかる。

以上のことから、「今昔物語集」と「古本説話集」が、文体、性格を多少異なるものであるにせよ、やはり両作品間では、そこに使用された謙譲の補助動詞がかなり異なり、短期の間に「参らす」が勢力を強めていったであろうということは、言えると考えられる。

第三章　「侍り」と「候ふ」

本章では「侍り」と「候ふ」の使用対象についての違いの有無を中心に「古本説話集」が成立した頃の「侍り」と「候ふ」の関係を明らかにしていく。猶本章で取り扱うのは、会話文中の対者敬語である「侍り」一九例と「候ふ」一〇七例である。

一節　「侍り」について

「今昔物語集」においては、「侍り」と「候ふ」の各々に、使用の原則があったが「古本説話集」においては、「侍り」についていえば、使用の際に、なんら原則らしきものはみられない。例えば「今昔物語集」にみられた、「侍り」の使用原則である、聞き手のトップクラスにⅠ群はまずない、神仏の祈りに用いた例はない、などは、「古本説話集」の「侍り」の使い方にはあてはまらず、聞き手として、道長や、僧が出てきたり、神仏の祈りの例もある。

結局「侍り」についていえることは、使用対象の上限はⅠ群の中の摂関あたりで、下限はⅢ群とされる。つまり使用数は少ないが、その使用対象の幅は広域であるということである。

二節　「候ふ」について

「候ふ」についてその使用対象を調べた結果まずいえることは、その上限は帝、下限は庶民と広域で使われている事である。次に、話し手上位、身分の低い者同志といった「今昔物語集」の「候ふ」の使用の際には到底みられなか

った使用対象の例が幾つもある、という事である。則ち、「侍り」と同様、「候ふ」にも「今昔物語集」にみられた使用の原則はみられない。

表五

	今昔物語集	古本説話集
ア	なし	侍り
イ	候ふ	
ウ	給ふ	
エ	なし	候ふ
オ	候ふ	
カ	侍り	

次に考えられる事は、一般に言われる「今昔物語集」が成立して数十年後に「古本説話集」が成立した、という説を裏付ける結果が、「候ふ」にでているといえ、通説は「候ふ」の面からも正しいと思われる。表五は「古本説話集」の「侍り」と「候ふ」を基準として、同様の説話のみられる「今昔物語集」では、各々の語の位置する場所はどうであるかをまとめたものである。特に「カ」は「侍り」から「候ふ」への典型的な使用の変化である。ア、イ、ウについては、両作品の原本と思われる「散佚古本宇治大納言物語」なる書物の存在に関わる問題と考えられ、ある程度忠実に原本の敬語に従って成立したのが「古本説話集」、編纂時の敬語意識を重視したのが「今昔物語集」ではなかったのか、などが考えられ、例外とみなせるだろう。よって「今昔物語集」「古本説話集」の順で成立したとされる説は、対者敬語が「侍り」「候ふ」の順で移り変わっていったことなども含めた「候ふ」の立場でも立証できるのである。

三節　説話内容からみた「侍り」と「候ふ」

「侍り」と「候ふ」の使用説話をみると、「侍り」のみの説話が三、「候ふ」のみの説話が一八、両者混用説話が三、であることがわかる。つまり「候ふ」のみを使用した説話が圧倒的に多いのである。さらに詳細に調べた結果、次のようなことがわかった。

一「侍り」の使用説話は十一世紀以前のもので、当時の話し言葉の残存として「侍り」が使用されていると考えられる。

二「候ふ」は「侍り」に比べると新しく成立したと思われる説話に用いられている。

三仏神に対しては、十一世紀以前の成立と考えられる説話の例を除けば、「候ふ」が用いられている。

四節　まとめ

以上のようなことから、対者敬語「侍り」と「候ふ」について、次の二つの事がわかる。まず、「今昔物語集」における桜井光昭氏の「侍り」「候ふ」の使用対象に関する原則は「古本説話集」には殆んど当てはまらないばかりか、「古本説話集」成立期には「侍り」は既に「候ふ」に完全に取って替わられていた、ということである。なぜなら、桜井氏の原則では「候ふ」と「侍り」は、ほぼ互いの使用領域を侵すことなく共存していたわけだが、「古本説話集」

では「候ふ」は、あらゆる場合に使用され、「侍り」の立場は、共存というより古い時代の残存という形でしか使用例を見出せないからである。次に言える事は、少くとも、対者敬語「候ふ」の面からみても、「古本説話集」は「今昔物語集」の後に成立したといえることである。なぜなら「侍り」と「候ふ」の使用比は、「今昔物語集」では一対一・八、「古本説話集」では一対四・六であるという数値が、「侍り」が平安後期からその役割を「候ふ」に取って替わられていくという説にあっていること、また既述の通り表五のような結果を「古本説話集」にみることができるということ、などのことからもわかるからである。

つまり「侍り」は「今昔物語集」の頃までは、敬意逓減の法則に従いつつ、かろうじてその生命を長らえていたが、「古本説話集」期になると、古い時代の話し言葉の残存、いわばその痕跡を残すに止まるだけでしかなかったということになる。

結　論

本稿では「古本説話集」の敬語について、尊敬語、謙譲語、丁寧語の三つの面から各々の特色の一断面をみてきたわけだがそれによってわかったのは次のようなことである。

まず尊敬語として選んだ補助動詞四段活用「給ふ」は、「今昔物語集」にみられる使用対象の原則を殆んど破ることなく、踏襲している形をとり、特にこれといって変わった点は見出せなかった。

次に謙譲語について調べたが、中世に隆盛を極める「参らす」が、「今昔物語集」では無きに等しいのに、数十年後に成立したとされる「古本説話集」の中では早くも力を伸ばしてきて、衰微の一途を辿る「きこゆ・きこえさす」「申す」の使用部分に侵入し、また一方で当時謙譲の補助動詞として確固たる地位を築いていた「奉る」の使用領域さえも脅かそうとしていたということがわかった。もちろん両作品の性格の違いなども考慮にいれなければならないわけだが、「参らす」が勢力を広げつつある過程に「古本説話集」があるわけで、このような変容は、やはり古代から中世への移り変わりの時期に、この作品が編纂されたためである、という事はいえると思われる。

最後に丁寧語の「侍り」「候ふ」に関して言えることは、「今昔物語集」にみられた各々の使用対象その他あった使用上の原則が、「古本説話集」においては悉く崩れているということである。さらに言えば、「候ふ」が完全に丁寧語としての地位を確立したために「侍り」はその存在を古代の遺物としてしか認められなかったということになる。

「古本説話集」は、その成立時期が、古代から中世への過渡期であったため、一方で尊敬の補助動詞「給ふ」のように、なんら変化せず使用されていく敬語を抱えつつ、また一方で、謙譲の補助動詞「きこゆ・きこえさす」、丁寧語の「侍り」を切り捨てて、その代わりに「参らす」や「候ふ」を迎え入れていたわけである。それは「古本説話集」なる作品が、時代の流れに応じた、当時代の文学作品の先端を行くものだったためと、いえるであろう。

		地　文	会話文	計	
奉ル	天竺・震旦部	208	170	378	
	本朝仏法部	290	250	540	
	本朝世俗部	26	90	116	
	計	524	510	1, 034	
聞ユ	天竺・震旦部	0	1	1	本動詞とも1
	本朝仏法部	0	3	3	6
	本朝世俗部	0	10	10	21
	計	0	14	14	28
申ス	天竺・震旦部	12	21	33	
	本朝仏法部	35	30	65	
	本朝世俗部	25	37	62	
	計	72	88	160	

表一　「奉ル」「聞ユ」「申ス」の分布（但し件数分布）
桜井光昭著「今昔物語集の語法の研究」より

		地　文	会話文	計
奉る	本朝世俗部	8	7	70
	本朝仏法・天竺部	40	15	
参らす	本朝世俗部	3	1	29
	本朝仏法・天竺部	14	11	
申す	本朝世俗部	5	1	13
	本朝仏法・天竺部	4	3	
きこゆ・きこえさす	本朝世俗部	2	1	3
	本朝仏法・天竺部	0	0	
給ふ	本朝世俗部	0	2	3
	本朝仏法・天竺部	0	1	
	計	76	42	118

表二　「古本説話集」における謙譲の補助動詞の分布
（但し延べ語数分布）